

私が見た

「佐伯海軍航空隊と  
連合艦隊」の教訓

武田 剛

(会員佐伯市木立)

私は昭和四年生まれの八十歳であるが一番幼いときの記憶は、兄信治郎に背負われて母の実家に行く途中、小さな峠の杉並木で梢の間の空に飛行機を見たことである。兄の背に立ち上がるようにして「にいやん、にいやん、おおきこうきぶーん」と叫んだのを覚えている。兄に背負われる位だから二歳か三歳位だったのだろう。

最近「佐伯市史」の中に海軍航空隊誘致の記事を読んでいた。「昭和六年の五月末、呉海軍航空隊の水上機二機が飛来し、大入島荒網代を基地として女島候補地を中心に付近一帯を広範囲にわたって精密な調査飛行を五日

間早朝から夜八時頃まで佐伯市街はもちろん沿岸部、山間部一帯の上空をくまなく調べた」とある。

赤ん坊の私が見たのは、おそらくこのときの飛行機であろう。「兄さん兄さん大きい飛行機ブーン」という私の人生最初の驚きの言葉は、いつまでも兄や姉からからかわれた。

昭和九年五歳の時、父が航空隊開隊式に連れて行ってくれた。五歳ともなれば記憶は鮮明で、物凄い人出、見上げるようなコンクリートの庁舎に驚き、舞い上がり舞い降り、宙返り、キリモミする飛行機をバナナを食べながら呆然と眺めた。それから毎日のように遠くはなれた木立まで爆音が聞こえ、それが年々大きくなり新型機にかわり数も増えた。

小学校二年の時、中国と戦争を始めると「佐伯の航空隊が上海・南京を空襲した」と聞いて、あの東シナ海を越えて行ったのかと驚いた。

つい先日、本屋で「日中戦争の全貌」という本をみつけた。太平洋戦争研究会の出版である。その中に「佐伯海軍航空隊は第十二航空隊と呼ばれ、上海・南京・重慶

を爆撃した。特に重慶の爆撃は海軍航空隊が二十九回、陸軍航空隊が八回、爆弾一万発、一、四〇五トンを投下して市街地を焼き多数の市民を殺傷した」とある。いわゆる無差別爆撃をやったというのだ。記録では死者六万人とある。

これを読んで私は大きなショックを受けた。「本」には重慶市民の折り重なった死体の山の写真が載っている。レンガで出来た低い街並に一万発も落とされたら、その惨状はどうであつたろうか。罪のない女・子供・老人まで殺りくしたのだ。

昭和二十年四月B 29の爆撃で電報電話局前の馬場の松の防空壕に落とされたたつた一発の爆弾で三十三人（四十五人ともいう）が吹っ飛んだ。私はそのむごたらしい死体を戸板に乗せて善教寺に運んだがたつた一発である被害、一万発とは想像を絶する。

その当時は国際法で軍隊・軍事施設以外のつまり市街地・住民・住宅の爆撃は禁止されていた。それをわが佐伯海軍航空隊がふみにじって無差別に爆撃したという。何というおぞましい事をやったのだろうか。

佐伯南郡の町民があげて誘致に熱中し、決定すると

祝賀に湧いた。そして佐伯町の年間予算が九万一千円の時、三万一千円も借金をして航空隊用地代を負担して建設した航空隊がこんなひどいことをやったのかと、私は暗然とした。第十二航空隊にやる、やらないの自由はない。軍から命令されればやらねばならない。しかし無差別に爆撃をした航空隊つくりには佐伯が手を貸した事実は永久に消えない。

世界でこの国際法を最初に破つたのは、あのヒットラーである。スペイン内戦に介入してゲルニカという町を無差別爆撃し多数の市民と家畜を殺傷した。この様子はピカソが描いた大作「ゲルニカ」で有名である。ヒットラーの悪業はゲルニカと共に消えない。ヒットラーはアウシュビッツ収容所で二百七十万人のユダヤ人を虐殺した極悪の男であるが、ゲルニカの無差別爆撃も世界中からごうごうたる非難をあびた。一ヶ月あと世界で二番目の無差別爆撃が日本の爆撃でその中心の航空隊がわが佐伯空だったのだ。あのヒットラーと同じ事をやったのだ。

この事は佐伯の人はほとんど知らなかっただろう。しかしその史実が残っている以上、佐伯町の景気浮揚でどりくんだ航空隊づくりが結果として中国民衆を殺りくし

た事実には佐伯市民は真剣に向き合わねばならないと思う。

日本が無差別爆撃してから国際法は空文化し第二次世界大戦では無差別は当然化した。もし重慶爆撃がそうでなかったら私たちは永久にヒットラーを非難できただろうに、第二次世界大戦の死者は激減したのであるうに。ヒットラーに追隨した日本軍の軽卒は後世なお一層指彈されるのではないか。残念なことに佐伯は重慶爆撃によって世界史に不名誉な名を残した。

せまい佐伯が世界に大きくかわったのは航空隊だけではない。も一つが軍港だった。佐伯が軍港化したのは市史によると「明治四十四年に日本海軍のほとんど全部七十余隻が佐伯湾に集結した」とある。以来たびたび連合艦隊が入港した。

私が小学校一年から中学一年にかけて、父が鶴見・日野浦の有明小学校校長だったので夏休みなどには単身赴任の父と暮らした。その頃湾内にはいつもの様に軍艦が停泊していて私はほとんどの艦種・艦名を覚えた。戦艦「伊勢」には乗って見学した。小学六年の秋、丹賀沖に仮泊するおそろしいような巨艦を見た。戦後それが「大和」だったことを知った。そして六年の冬、沢山の連合艦隊

が入港しているのが茶屋ヶ鼻橋から見えたので灘山にかけ登って見た。戦艦・航空母艦・巡洋艦・駆逐艦がいっぱい停泊していた。あくる朝、茶屋ヶ鼻から見るともう海は空っぽだった。

そして十二月八日、登校したら学校のラジオでアメリカ・イギリスと戦争を始め真珠湾を攻撃し大戦果をあげたことを知った。「あの軍艦がやったんだ」と思った。その通りだった。開戦前から航空隊は訓練が激しくなり、毎日朝から飛行機が飛び立った。九七式艦上攻撃機（翼の先が角張っていた）そして九九式艦上爆撃機（翼の先がとがっていた）は佐伯上空を旋回し高度をあげると白坪の上空からまるで逆落としのように航空隊めがけて急降下爆撃の訓練をくり返していた。突っ込んだ飛行機が濃霞山より低いので地上に激突したのではないかとハラハラした。その艦爆・艦攻・ゼロ戦を満載した空母は佐伯湾を出発、千島のヒトカツプ湾を経てハワイを攻撃したのだ。

人類史上最大の惨劇、太平洋戦争の始まりだった。出発も佐伯なら攻撃機の主力も佐伯空、私は出発前日のその姿を見たのだ。

陸軍は中国と戦争を始め、海軍は米・英と戦争を始めた。陸軍は「中国はちよつと攻撃すればすぐ白旗をあげる」とみくびっていた。ところが中国は北京・上海・南京を占領され重慶をたていでいて爆撃されても降参しなかった。しまいに陸軍は戦線の維持に困り「何のため中国と戦争しているのか」わからなくなっていた。

海軍もまた、ハワイの太平洋艦隊をやっつければアメリカは手も足も出さず「すぐ講和を申し込んでくる」と樂觀してハワイを攻撃した。なんというお粗末さであろうか。

しかし時の政府部内もバカばかりではなかった。事前にちゃんと日・米の国力、軍事力の比較をしていた。調査したのは「秋丸機関」と呼ばれた。この報告によれば、鉄はアメリカが日本の十三倍、石油は九六六倍、兵員数二倍、飛行機日本一万機、アメリカ六万機、艦船日本一四〇万トン、アメリカ四二七万トン、というのがわかった。圧倒的な大差で秋丸機関の結論は「とても戦いはならない」だった。

日本は石油はゼロに等しい。ほとんど全量をアメリカから輸入していた。それを憂慮し開戦に反対する海軍首

脳も多かった。しかしその頃日本はアメリカ・イギリスから「中国から撤退せよ」と要求され「ABC包圍陣」という経済封鎖でしめつけられていた。これに短慮な海軍軍人が憤激してハワイ攻撃を決断させたのだ。石油を売ってもらっている国に戦争をしかけて勝てるわけがない。それを「鬼畜米英」だの「神州不滅」「神風が吹く」など空虚な神がかりなことをいって、無謀にも国運をかけた戦争に突入したのだ。これこそ国民のことを考えず功を焦る軍部の横暴であろう。もし日中戦争を終結して米英と開戦しなかったならば次のような膨大な戦死者の数にはならなかっただろう。

日中戦争から敗戦までの八年間、日本全部の戦死者は三二〇万人、軍人の戦死者は二三〇万人、そのうち餓死した兵隊は一四〇万人、中国・東南アジアの戦死者二千万人、米・英軍の死者をあわせると二千五〇〇万人といわれる。

私は餓死する兵隊の実録を元大入島郵便局長柴富浩氏の「海軍ビルマ陸戦隊戦記」で知った。

もし秋丸機関の調査結果を冷静に受け止めて自制し開戦しなかったら、この中のどれだけの命が助かったであ

ろうか。佐伯も「連合艦隊発進の地」という自慢とも悔恨ともつかない石碑を建てなくともすんだのに。

この人類史上最悪の原爆まで使われた戦争のスタート地点が佐伯だったことは、何も佐伯市民に責任があるわけではない。それは大本営と海軍のせいであり不幸にも天然の良港の佐伯湾があつたせいだろう。

しかし軍港化を積極的に受け入れ、艦隊の入港を歓迎した市民、乗組員上陸でうるおつた料飲街にまつたく責任がないとはいえない。その責任に気がつかないか、ふれようとしなただけだ。

そしてその佐伯の人が歓呼の声で迎えた、あの雄姿を誇つた連合艦隊の運命・末路はどうであつたか。それはほとんど撃沈され海の藻くずとなつた。その数、戦艦一隻・航空母艦二隻・巡洋艦四隻・駆逐艦一三三隻・潜水艦一九二隻・海防艦八三隻・輸送船二、五六八隻、救助された乗組員は少なく、皆溺れるか艦内に閉じこめられ、もがき苦しんで死んだ。

「巨大戦艦「大和」も鹿児島沖で撃沈された。永らく日本海軍を代表し佐伯の人もなじみが深かつた名戦艦「長門」は生きのびたが、米海軍に拿捕され水爆実験の標的

にされるといふみじめなさであつた。日本のあの艦艇のなんと哀れな末路であろうか。

航空隊の末路はどうであつたか、私は五歳のとき開隊式を見たが、十六歳のときにはその壊滅する姿を見た。

私は中学三年のとき、学徒動員で坂ノ浦の造船所で二五〇トンの木造油送船を造つた。少年船大工である。造船所の背後に小高い山があり反対側は葛港である。その山のとつぺんの松の木に板を渡して対空監視をした。敵機が来ると釣り下げた鉄板をハンマーでガンガン叩いてみんなを横穴の防空壕に避難させた。

この木の上から海軍の防備隊・軍需部が一目に見渡せた。現在の鶴谷区・野岡区一帯である。現在興人の敷地になっている航空隊は長島山の向こうで見えにくかつた。そこへグラマン・コルセアの大群が襲いかかつてきた。憎たらしいずんぐり丸いグラマンが超低空で突つ込んできて爆弾を落としては機銃掃射をする。ある朝、同級生の谷川副郎さんと造船所に行く途中、蛇崎でグラマンの機銃掃射を受けた。弾丸の爆風で田の中にふっ飛ばされたが怪我はなかつた。造船所も船台の杉皮屋根がバリバリやられ造っている船の板に穴があいた。

防備隊・軍需部は大きな建物・倉庫が立ち並んでいたが、ポートシコルスキーのコレアという主翼が折れ曲がった精悍な感じの飛行機が来て、胴体の下から火を吹くロケット弾が飛び出し、あつという間にふつ飛ばされてしまった。これに対抗し濃霞・長島の山々からの機関銃・機関砲・高射砲が応戦した。その弾が敵機に集中する有様が曳光弾でわかった。グラマン・コレアが命中弾を受けて、石間のトウドウ鼻の沖や守後の沖に大きな水しぶきをあげて墜落するのを見た。現在「やわらぎ」に展示されている飛行機エンジンは当時のコレアのものである。

その頃陸軍の新鋭機「飛燕<sup>ひえん</sup>」一〇機程がB29の迎撃に佐伯に配置された。迎撃に飛び立ち給油のため航空隊に着陸したら、それを見ましたかのようにB29に爆撃され天高く物凄く立昇る煙が見えた。私は帰りに女島まで行き掩射壕の上に立って、そのメチャメチャにこわされた残骸を望見した。ほんとに「あつ」という間の航空隊の終えんだった。あれほど大さわざして誘致した航空隊のなんともあつけない最後だった。この時の航空隊側の様子が佐伯出身高木晃治氏の「足摺岬の海と空」に詳述

されている。

敗戦後のある日、鶴見から蒲江に連なる山々から、まるで黒雲が湧くような米軍機の大編隊を見た。七百機までは数えた。米軍記録は千機を超えたという。まさに圧倒的な敗北だった。秋丸機関の予測通りだった。

我が国がこのような有様になるのを予見したのか、軍港化に反対した人がいた。佐伯の先哲矢野龍溪である。「平和祈念館やわらぎ」に龍溪の毛筆の手紙が展示されている。それは一九一九年（大正八年）に当時の佐伯町長小田部隣に宛てた「戦禍を憂え、平和を祈念し、軍港誘致に反対する」手紙である。もし当時の町長・議会・町民が誘致に浮き足立たず、この意見に耳を傾けていたら、もしかしたら世界の歴史が違っていたのではないかと思う。少なくとも無差別爆撃に名を残さず、太平洋戦争の出発点にならずにすんだだろう。

佐伯には今なお海上自衛隊の分遣隊がある。市議会や会議所の中にはこれを基地に格上げしたり、潜水艦基地を誘致しようという動きがあって、議会が紛糾したことがあった。しかしこれには市民は踊らなかつた。基地化の本音は飲屋街の客寄せの思惑がみえみえだったし、基

地化するよりしつかりした産業基盤を作った方が佐伯が  
発展すると考えたからだろう。

市民の中には「自衛隊のグラウンドを造船所などに活用  
して雇用の増大をはかれ」という声も多いし、永い間広  
大な航空隊跡地をひとり占めにし、公害をたれ流した興  
人のまだまだ広い遊休地に対し「市は興人に活用を迫れ」  
という声も多い。これらの活用要求に対し行政努力を怠  
りながら「石間の海を埋め立てなければ佐伯の発展はな  
い」などの論議はまったくナンセンスであろう。

今や世界の軍備は軍艦・飛行機からミサイルに変わっ  
ている。爆弾をわざわざ飛行機で運ばなくても人工衛星  
のようなミサイルがボタン一つ押すだけで世界中どこで  
も届く。現在の世界各国のミサイルの保有台数が新聞に  
出ていた。その数、ロシア七、二〇〇基・アメリカ五、  
七三六基・英二〇〇・佛三五〇・イスラエル二〇〇・パ  
キスタン七〇・インド五〇・中国三三〇・北朝鮮二二、  
計一四、三三八基で驚くべき数である。このまま増えた  
ら大変だと削減計画が話し合われたが、ヨーロッパでは  
アメリカの新たな配備計画が進行している。特にロシ  
ア・アメリカ・中国には宇宙から落下するような大型が

多い。日本周辺の国には日本の在日米軍基地・自衛隊基  
地・大都市に照準を定めた相当数の核弾頭ミサイルが配  
備されているといわれている。

それで近頃の新聞には飛んで来るミサイルを撃ち落と  
す迎撃ミサイルの記事が多い。しかしその効果は守備範  
囲がせまく全体をカバーするのは不可能なようだ。それ  
で「とにかく一秒でも早くボタンを押した方が勝ち、し  
かし押せば人類の破滅を招くから押せない」というきわ  
どい均衡の上に、今私たちの生活が営まれているのだ。

今何より肝心なことはミサイルの標的にされるような  
軍事施設は絶対作ってはならないと云うことであろう。  
佐伯に自衛隊基地があれば飛んで来る確率は高くなる。  
絶対来ないという保証はどこにもない。それこそ無差別  
にやられ、たった一発で佐伯がふっ飛ぶおそれがある。  
航空隊を作るとき爆撃を受けると誰が思っただろうか。  
旧佐伯市南郡の戦死者は四、〇五九人にのぼる。私の兄  
もその一人だった。ミサイルになればとてもこれ位では  
なからう。

戦死者の悲憤、家族の悲哀を思うとき、これだけは絶  
対避けねばならない。佐伯市民はこぞって軍港・航空隊

を誘致した。それが国内外に甚大な惨禍をもたらした一つの要因になった。その反省の上に立って自衛隊の基地昇格どころか分遣隊も廃止すべきだと思う。世界には軍隊を持たない国が二七ヶ国もあって外交と教育に力を入れて平和を維持している。

日本は自衛隊に五兆円も使っている。国を守るといふより又そのため破滅に向かっていっているような気がする。自衛隊は自然災害から国民を救う「国民救助隊」になってもらいたいものだ。

かつての海軍航空隊司令部の庁舎は現在自衛隊の庁舎になっているが、これを取りこわして建て替える計画があるという。これに対し歴進会の松垣七郎さん達を中心になって「佐伯の戦争歴史遺産として残すように」市長に強く要望している。建て替へは基地化を進めるといふことだろうか。

市は平和を願うならば、この貴重な遺産を後世に伝えるべきだ。広島原爆ドームのように大切にしなければならぬ。今こそ市長・議会・教委の見識が問われている。かりそめにも建設業者の仕事欲しさに惑わされて、かけがえのない遺産を失うようなことになれば後世市民

から「バカじゃのう」と指弾されるに違いない。少なくとも龍溪のような見識を持ってもらいたいものである。

佐伯町の総予算九万円のととき航空隊をつくる土地代に三万円も負担したのだ。「残せ!!」というのに何の遠慮があらうか。

幸いにも市長は保存の方向で努力しているという。その結果を注目している。



掩体壕と旧海軍航空隊庁舎